

# 第 1 章

## 射影行列

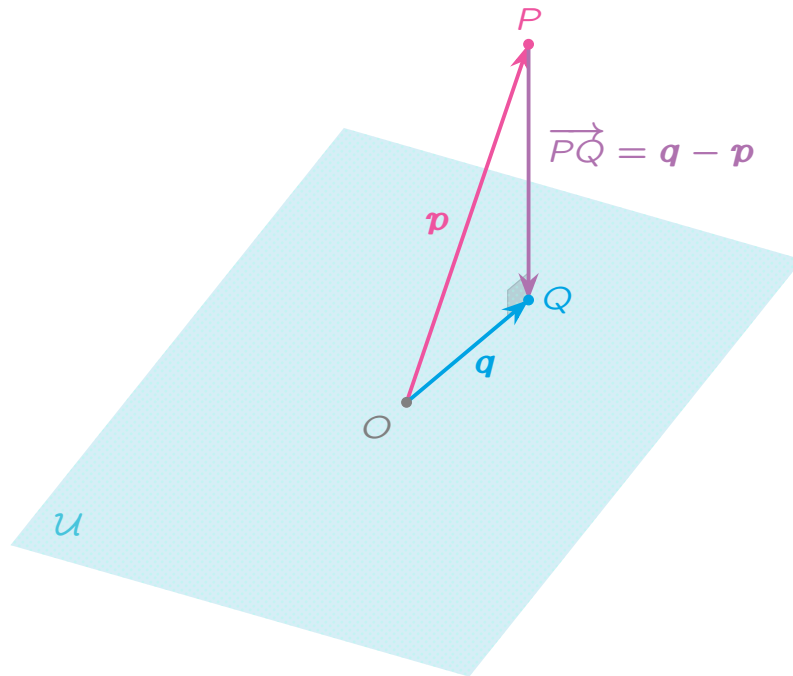


### 直交射影と反射影

$\mathbb{R}^n$  上の点  $P$  に対して、部分空間  $\mathcal{U}$  上の点  $Q \in \mathcal{U}$  のうち、 $\overrightarrow{PQ}$  が  $\mathcal{U}$  に直交するような点  $Q$  を、点  $P$  の  $\mathcal{U}$  への直交射影あるいは正射影という

また、 $\overrightarrow{QP}$  を点  $Q$  の  $\mathcal{U}$  からの反射影という

射影前のベクトルを  $\boldsymbol{p}$ 、射影後のベクトルを  $\boldsymbol{q}$  とすると、直交射影とは、 $\boldsymbol{q}$  と  $\boldsymbol{q} - \boldsymbol{p}$  が直交するように射影することである



このとき、次のような関係が成り立っている

$$\begin{aligned}\vec{OP} &= \vec{OQ} + \vec{QP} \\ \vec{OQ} &\in \mathcal{U}, \quad \vec{QP} \in \mathcal{U}^\perp\end{aligned}$$

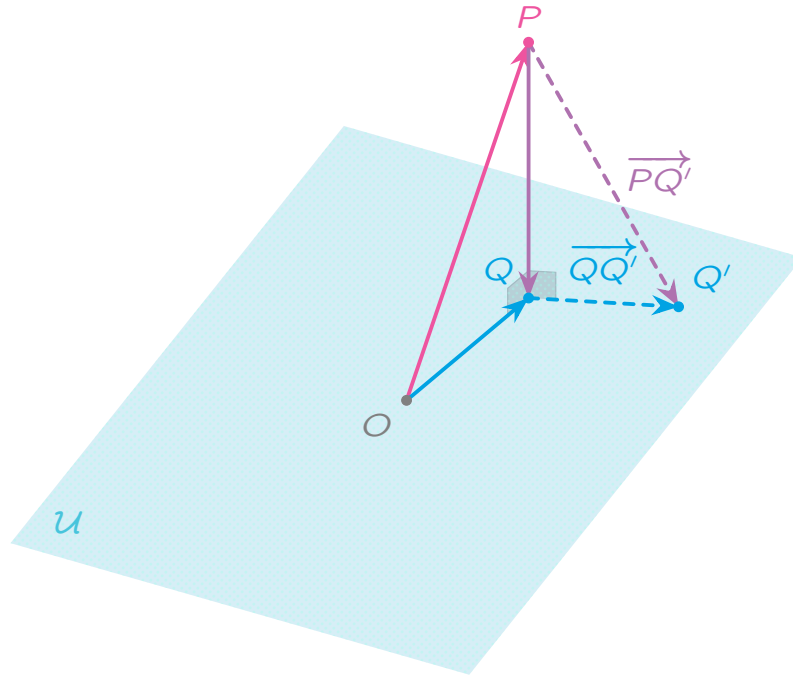
ここで、 $\mathcal{U}^\perp$  は部分空間  $\mathcal{U}$  に直交するベクトルの全体であり、 $\mathcal{U}$  の直交補空間と呼ばれる  $\mathbb{R}^n$  の部分空間  $\mathcal{U}$  の直交補空間  $\mathcal{U}^\perp$  も、 $\mathbb{R}^n$  の部分空間となる

$\vec{OP}$  は  $\mathbb{R}^n$  の任意のベクトルを表すことから、 $\mathbb{R}^n$  のベクトルは、 $\mathcal{U}$  への射影  $\vec{OQ}$  と、 $\mathcal{U}$  からの反射影  $\vec{QP}$  の和として表されることがわかる

このような表し方は一意的であり、 $\vec{OP}$  の  $\mathcal{U}$  と  $\mathcal{U}^\perp$  への直和分解という

## 直交射影と最短距離

点  $Q$  を  $\mathcal{U}$  上の別の点  $Q'$  に移動した場合を考える



このとき、三平方の定理より、

$$\|\overrightarrow{PQ'}\|^2 = \|\overrightarrow{PQ}\|^2 + \|\overrightarrow{QQ'}\|^2 > \|\overrightarrow{PQ}\|^2$$

となるから、



直交射影した点  $Q$  は、  
点  $P$  から最短となる  $\mathcal{U}$  上の点



であることがわかる



## 射影行列

ベクトルの射影の概念は、**射影行列**を用いて表現できる。

任意のベクトル  $\boldsymbol{x} \in \mathbb{R}^n$  は、 $\boldsymbol{u} \in \mathcal{U}$ 、 $\boldsymbol{u}^\perp \in \mathcal{U}^\perp$  を用いて

$$\boldsymbol{x} = \boldsymbol{u} + \boldsymbol{u}^\perp$$

と一意的に分解できる (**直和分解**)。

ここで、 $\boldsymbol{x}$  の  $\mathcal{U}$  への射影を表すのは、 $\boldsymbol{u}$  である。

つまり、 $\mathcal{U}$  への射影とは  $\boldsymbol{x}$  のうち、 $\mathcal{U}$  に含まれる成分  $\boldsymbol{u}$  だけを取り出す操作といえる。  
そこで、部分空間  $\mathcal{U}$  へ射影する写像を  $P_{\mathcal{U}}$  とすると、

$$P_{\mathcal{U}}\boldsymbol{x} = \boldsymbol{u}$$

という、「 $\boldsymbol{x}$  に  $P_{\mathcal{U}}$  を作用させると  $\boldsymbol{u}$  だけが残る」という形で書ける。

## 部分空間への射影

このとき、 $\boldsymbol{x}$  がもともと  $\mathcal{U}$  の元である場合は、 $\boldsymbol{u}^{\perp} = \boldsymbol{o}$  の場合と考えて、

$$\boldsymbol{x} = \boldsymbol{u} + \boldsymbol{o} = \boldsymbol{u}$$

つまり、射影しても変わらないので、

$$P_{\mathcal{U}}\boldsymbol{x} = \boldsymbol{u} = \boldsymbol{x} \quad (\boldsymbol{x} \in \mathcal{U})$$

である。

一方、 $\boldsymbol{x}$  が  $\mathcal{U}$  の直交補空間  $\mathcal{U}^{\perp}$  の元の場合は、 $\boldsymbol{u} = \boldsymbol{o}$  の場合と考えて、

$$P_{\mathcal{U}}\boldsymbol{x} = \boldsymbol{u} = \boldsymbol{o} \quad (\boldsymbol{x} \in \mathcal{U}^{\perp})$$

となる。

以上をまとめると、次のように書ける。

$$P_{\mathcal{U}}\boldsymbol{x} = \begin{cases} \boldsymbol{x} & (\boldsymbol{x} \in \mathcal{U}) \\ \boldsymbol{o} & (\boldsymbol{x} \in \mathcal{U}^{\perp}) \end{cases}$$

同様に、直交補空間  $\mathcal{U}^{\perp}$  へ射影する写像を  $P_{\mathcal{U}^{\perp}}$  とした場合、

$$P_{\mathcal{U}^{\perp}}\boldsymbol{x} = \begin{cases} \boldsymbol{o} & (\boldsymbol{x} \in \mathcal{U}) \\ \boldsymbol{x} & (\boldsymbol{x} \in \mathcal{U}^{\perp}) \end{cases}$$

とまとめられる。

## 射影行列の展開

$\mathbb{R}^n$  が  $\mathcal{U}$  と  $\mathcal{U}^{\perp}$  の直和に分解されることから、 $\mathbb{R}^n$  の基底は  $\mathcal{U}$  の基底と  $\mathcal{U}^{\perp}$  の基底を合わせたものになる。

そこで、部分空間  $\mathcal{U}$  の正規直交基底  $\{\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_r\}$  を選ぶと、これを  $\mathbb{R}^n$  の正規直交基底  $\{\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_r, \mathbf{u}_{r+1}, \dots, \mathbf{u}_n\}$  に拡張できる。

ここで、 $\{\mathbf{u}_{r+1}, \dots, \mathbf{u}_n\}$  は  $\mathcal{U}^\perp$  の正規直交基底になる。

このとき、

$$P_{\mathcal{U}}\mathbf{x} = \begin{cases} \mathbf{x} & (\mathbf{x} \in \mathcal{U}) \\ \mathbf{0} & (\mathbf{x} \in \mathcal{U}^\perp) \end{cases}$$

という式は、 $P_{\mathcal{U}}$  が  $\mathbb{R}^n$  の正規直交基底

$$\{\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_r, \mathbf{u}_{r+1}, \dots, \mathbf{u}_n\}$$

を、それぞれ次のように写像することを意味する。

$$\{\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_r, \mathbf{0}, \dots, \mathbf{0}\}$$

同様に、

$$P_{\mathcal{U}^\perp}\mathbf{x} = \begin{cases} \mathbf{0} & (\mathbf{x} \in \mathcal{U}) \\ \mathbf{x} & (\mathbf{x} \in \mathcal{U}^\perp) \end{cases}$$

という式は、 $P_{\mathcal{U}^\perp}$  が  $\mathbb{R}^n$  の正規直交基底

$$\{\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_r, \mathbf{u}_{r+1}, \dots, \mathbf{u}_n\}$$

を、それぞれ次のように写像することを意味する。

$$\{\mathbf{0}, \dots, \mathbf{0}, \mathbf{u}_{r+1}, \dots, \mathbf{u}_n\}$$

ゆえに、正規直交基底による表現行列の展開より、 $P_{\mathcal{U}}$  と  $P_{\mathcal{U}^\perp}$  は次のように表現できる。

$$\begin{aligned} P_{\mathcal{U}} &= \mathbf{u}_1\mathbf{u}_1^\top + \dots + \mathbf{u}_r\mathbf{u}_r^\top \\ P_{\mathcal{U}^\perp} &= \mathbf{u}_{r+1}\mathbf{u}_{r+1}^\top + \dots + \mathbf{u}_n\mathbf{u}_n^\top \end{aligned}$$

$P_{\mathcal{U}}$  と  $P_{\mathcal{U}^\perp}$  をそれぞれ、部分空間  $\mathcal{U}$ 、およびその直交補空間  $\mathcal{U}^\perp$  への射影行列と呼ぶ。



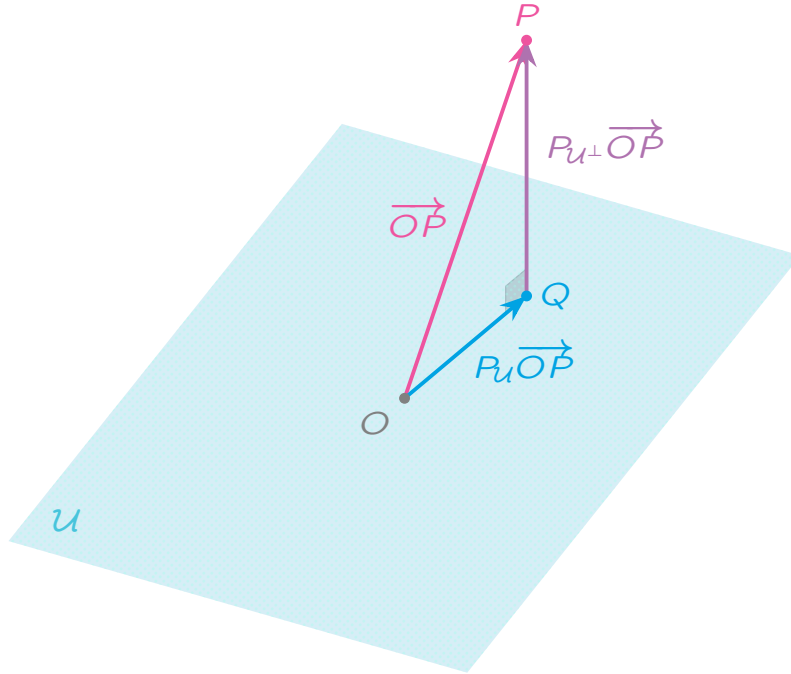
## 単位行列の射影行列への分解

直交射影と反射射の章で示した、

$$\begin{aligned} \overrightarrow{OP} &= \overrightarrow{OQ} + \overrightarrow{QP} \\ \overrightarrow{OQ} &\in \mathcal{U}, \quad \overrightarrow{QP} \in \mathcal{U}^\perp \end{aligned}$$

という関係は、射影行列を用いて、次のようにも表せる

$$\begin{aligned}\overrightarrow{OP} &= P_U \overrightarrow{OP} + P_{U^\perp} \overrightarrow{OP} \\ &= (P_U + P_{U^\perp}) \overrightarrow{OP}\end{aligned}$$



$\mathbb{R}^n$  内のすべての点  $P$  に対して、 $\overrightarrow{OP} = (P_U + P_{U^\perp}) \overrightarrow{OP}$  が成り立つことから、

$$P_U + P_{U^\perp} = E$$

が成り立っている

これはすなわち、単位行列  $E$  が、部分空間  $U$  その直交補空間  $U^\perp$  への射影行列の和に分解できることを意味する

$$E = \underbrace{\mathbf{u}_1 \mathbf{u}_1^\top + \cdots + \mathbf{u}_r \mathbf{u}_r^\top}_{P_U} + \underbrace{\mathbf{u}_{r+1} \mathbf{u}_{r+1}^\top + \cdots + \mathbf{u}_n \mathbf{u}_n^\top}_{P_{U^\perp}}$$

この式により、単位行列  $E$  自体を、空間全体  $\mathbb{R}^n$  への射影行列と考えることもできる



## 射影行列とノルム

$P_U \overrightarrow{OP}$  と  $P_{U^\perp} \overrightarrow{OP}$  は直交するから、三平方の定理より、

$$\|\overrightarrow{OP}\|^2 = \|P_U \overrightarrow{OP}\|^2 + \|P_{U^\perp} \overrightarrow{OP}\|^2$$

がいえ

ゆえに、任意のベクトル  $\mathbf{x} = \overrightarrow{OP}$  に対して、


$$\|\mathbf{x}\|^2 = \|P_{\mathcal{U}}\mathbf{x}\|^2 + \|P_{\mathcal{U}^\perp}\mathbf{x}\|^2$$

が成り立つ



## 射影行列の冪等性と対称性

「一度射影した点をもう一度射影しても変化しない」という性質は、次のような数式として表現できる

 射影行列の冪等性 射影行列  $P_{\mathcal{U}}$  は冪等である

$$P_{\mathcal{U}}^2 = P_{\mathcal{U}}$$

 証明

$$\begin{aligned} P_{\mathcal{U}}^2 &= \left( \sum_{i=1}^r \mathbf{u}_i \mathbf{u}_i^\top \right) \left( \sum_{j=1}^r \mathbf{u}_j \mathbf{u}_j^\top \right) \\ &= \sum_{i=1}^r \sum_{j=1}^r \mathbf{u}_i \mathbf{u}_i^\top \mathbf{u}_j \mathbf{u}_j^\top \\ &= \sum_{i=1}^r \sum_{j=1}^r \mathbf{u}_i (\mathbf{u}_i^\top \mathbf{u}_j) \mathbf{u}_j^\top \\ &= \sum_{i=1}^r \sum_{j=1}^r \delta_{ij} \mathbf{u}_i \mathbf{u}_j^\top \end{aligned}$$

ここで、 $\delta_{ij}$  を含むことから、 $i = j$  の場合のみ項が残り、


$$P_{\mathcal{U}}^2 = \sum_{i=1}^r \mathbf{u}_i \mathbf{u}_i^\top = P_{\mathcal{U}}$$

が得られる



この  $P_{\mathcal{U}}^2 = P_{\mathcal{U}}$  という式は、一般の（必ずしも直交射影でない）射影の定義として用いられる

次の性質は、射影が直交射影であることを示すものである

 射影行列の対称性 射影行列  $P_{\mathcal{U}}$  は、対称行列である

$$P_{\mathcal{U}}^{\top} = P_{\mathcal{U}}$$

 証明

$$P_{\mathcal{U}}^{\top} = \left( \sum_{i=1}^r \mathbf{u}_i \mathbf{u}_i^{\top} \right)^{\top}$$

和の転置は転置の和であることを用いて、


$$P_{\mathcal{U}}^{\top} = \sum_{i=1}^r (\mathbf{u}_i \mathbf{u}_i^{\top})^{\top}$$

また、積の転置は転置の積だが、積の順序が入れ替わることに注意して、

$$P_{\mathcal{U}}^{\top} = \sum_{i=1}^r (\mathbf{u}_i^{\top})^{\top} \mathbf{u}_i^{\top}$$

転置の転置をとると元に戻るので、

$$P_{\mathcal{U}}^{\top} = \sum_{i=1}^r \mathbf{u}_i \mathbf{u}_i^{\top} = P_{\mathcal{U}}$$

が得られる 

射影行列は冪等かつ対称であるが、その逆も成り立つ



🚢 対称性と冪等性による射影行列の特徴づけ 対称かつ冪等な行列は、ある部分空間への射影行列となる

### 🔪 証明

$n$  次対称行列  $P$  は、 $n$  個の実数の固有値  $\lambda_1, \dots, \lambda_n$  を持つ

これらに属する固有ベクトルを  $\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n$  とすると、 $\mathbf{u}_i$  は互いに直交する

固有値と固有ベクトルの関係から、

$$P\mathbf{u}_i = \lambda_i\mathbf{u}_i$$

両辺に左から  $P$  をかけると、

$$\begin{aligned} P^2\mathbf{u}_i &= \lambda_i P\mathbf{u}_i = \lambda_i \cdot \lambda_i\mathbf{u}_i = \lambda_i^2\mathbf{u}_i \\ \therefore P^2\mathbf{u}_i &= \lambda_i^2\mathbf{u}_i \end{aligned}$$

ここで、 $P$  は冪等なので、 $P^2 = P$  が成り立つ

$$P^2\mathbf{u}_i = P\mathbf{u}_i = \lambda_i\mathbf{u}_i$$

これを用いると、

$$\lambda_i\mathbf{u}_i = \lambda_i^2\mathbf{u}_i$$

固有ベクトル  $\mathbf{u}_i$  は零ベクトルではないので、

$$\lambda_i = \lambda_i^2$$

よって、

$$\begin{aligned} \lambda_i^2 - \lambda_i &= 0 \\ \lambda_i(\lambda_i - 1) &= 0 \\ \lambda_i &= 0, 1 \end{aligned}$$

すなわち、固有値は 0 か 1 のいずれかである

そこで、

$$\begin{aligned} \lambda_1 &= \dots = \lambda_r = 1 \\ \lambda_{r+1} &= \dots = \lambda_n = 0 \end{aligned}$$

とおくと、

$$P\mathbf{u}_i = \begin{cases} \mathbf{u}_i & (i = 1, \dots, r) \\ 0 & (i = r + 1, \dots, n) \end{cases}$$

よって、 $P$  は  $\{\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_r\}$  の張る部分空間への射影行列である ■



## 超平面

[ Todo 1: ]



## 射影長

[ Todo 2: ]

.....

## Zebra Notes

Type	Number
todo	2